
カゲロウデイズ

あめみざき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カゲロウデイズ

【Nコード】

N2692BA

【作者名】

あめみざき

【あらすじ】

ボカロオリジナル曲「カゲロウデイズ」(自然の敵pこと じん氏作)をモチーフにした小説です。

携帯のアラームの音で目が覚めた。

まだ朝なのに気温は随分と高くなっているようで、散らかったままの部屋の中はむんとした熱気がこもっていて暑かった。

あぶら蝉の鳴き声が響いて頭が痛い。

音楽を聞きながら寝たせいで首にかかったままのヘッドホンを外す。欠伸をしながら開いた携帯の待ち受け画面には、

『8月15日（水） 08:01』

「あれ、拓海なんで制服なの」

一階に下りると、休みの日はいつも午後まで寝ている姉の梨沙がリビングのソファに寝転がっていた。

「うわ、この時間に起きてるとか珍し」

拓海が言くと梨沙は

「暑すぎて目が覚めちゃったんだよ」

と言ってだるそうに髪を掻きあげた。そして、

「拓海もう部活引退したとか言ってなかったっけ」

「補習なんだよ」

少しイラつとしながら拓海が答えると、

「ちよつとー大丈夫なの受験生ー」

どうでもよさそうに言いながらテーブルの上のリモコンに手を伸ばし、テレビのスイッチを入れた。

『おはようございます、今日は八月十五日の水曜日、朝のニュースを始めます……』

「拓海も梨沙ちゃんみたいに出来がよかったらねえ。どうしても公立に行ってももらわないと困るわよ」

ふたりの母親の香子が深刻そうな顔をして、キッチンから目玉焼き

ののつた皿を運んできた。

「うつせーな、どうせ勉強したって頭わりー奴は頭わりーままなんだよ、バーカ」

拓海はドボドボと麦茶を乱暴に注ぐ。

「馬鹿はお前だろー」

テレビ画面を見ながら梨沙が返した。ニュースキャスターは終戦記念日に関する原稿を読み上げている最中だった。

香子は食卓に目玉焼きを置くと、ソファの上の梨沙に向かって、

「梨沙ちゃんも食べる？」

「ん、あたしはいらない。昨日飲み過ぎて頭痛い」

梨沙がクッションに顔を埋めて言うと、

「じゃあ俺もパスで」

拓海は麦茶を一気に飲み干してからスクール鞆を掴み席を立った。

玄関でスニーカーに足をつっ込んでいると、

「ちょっと拓海ー、折角つくったんだからっ、まだ時間あるんだから食べてきなさい」

「朝ごはん食わないと頭回らないぞー」

という香子と梨沙の声が聞こえてきたが、拓海は構わずにひとつ舌打ちをしてから家を出た。

「よっ」

家の前の横断歩道で信号待ちをしていると、背後から肩をポンと叩かれた。

「ああ、南沢」

振り返ると拓海と同じ学校で同じ学年の南沢が、制服姿でニコニコしながら立っていた。

「三宅も補習？」

「ああ」

「だよねー」

あははと笑いながら、南沢は拓海の隣に並んで同じく信号を待った。横断歩道の上では陽炎がゆらゆらと踊っていた。その中を車が何台も行き交っていく。

拓海が隣に立つ南沢に何気なく視線を向けると、彼女の腕が目についた。

南沢の細い腕は彼女の着ているYシャツに負けないくらい真っ白で、汗のひとつ浮いていない。

こっちは空からさんと降り注ぐ太陽の光と、あつあつに熱されたアスファルトの地面のせいでげんなりとしているのに。

そしてさっきは暑さなどまるで関係なしのような軽やかな笑みで肩を叩いてきた。

「お前は随分と涼しそうだな」と拓海が言うと、

「そう？　そういう君は汗だく過ぎだね。まだ家から出てきて数分くらいしか経ってないのに」

南沢はそう言って横断歩道の目の前のアパートにちろりと目を向けた。

「……」

拓海と南沢は同じアパートの3階と1階に住んでいる。

そして1年生のときは同じクラスだった。

入学したての頃は、大抵出席番号順に席が決められている。

ふたりは「みなみさわ」「みやけ」と出席番号が前後で、当然教室での席も前後だったわけだが、その頃はお互い無関心で会話することもほとんどなかった。

しかしある朝、拓海がアパートの階段を下りてきたところ、丁度1階のドアが開いて南沢が出てきたところにバツタリ出くわし、お互い同じアパートに住んでいたことを知った。

そのことが発覚してからふたりは教室でもポツポツ喋るようになり、今では自然とお互い気軽に接せるような仲になっていた。

2年、3年では別々のクラスになったものの、近所のスーパーやコンビニで出くわすことも度々あったため、クラスが別になっても話す機会は多かった。

「つかお前ちゃんと補習来たんだな」

「ん？」

信号が青に変わり、ふたりは歩き出す。

「いや、サボりかと思った。家でずつと寝てそーだなんて思った」

「んー、私もそうしようと思ってただけだね」

「思ってたのかよ」

「暑すぎて起きちゃった」

「あ、梨沙も言ってたわそれ」

「扇風機も熱風だし」

「あー、わかるわかる」

「学校にはエアコンついてるでしょ」

「エアコン目当てで補習行くのかよ」

拓海は笑った。

「いいじゃん。どうせ勉強できなくても中学は卒業できるんだからさあ」

「まあ確かになー」

「三宅は真面目なんだね」

「いや、俺はどうにかして公立受からないと親に殺されるから」

「大変だね」

「母親は何かにつけて梨沙ちゃんはあるだったこーだったってうるせーしよ」

「うわあ、それは嫌だ」

「南沢はどうするわけ？ どっか行くの」

「まだ考えてない。働きたい気もするけど先生は無理だダメだよめとけってうるさいし」

「南沢は俺と違って頭いいんだからちゃんと勉強すればいいのに」
「んー……」

拓海が言つと南沢はつま先を見つめて言葉を濁らせた。

「うへー、終わった」

南沢がシャープペンを放り投げて、大きく伸びをした。シャープペンが机の上をカラカラと転がって床に落ちる。

「あ、ごめんね」

拓海がそれを拾い上げて、南沢に手渡した。

飾り気のないシンプルな銀色のシャープペンだ。

「やっぱお前もやれば出来んじゃない」

解き終わったプリントの束を机にトントンしながら拓海が言った。

「いいい。でも最後の方は三宅にちよつと手伝ってもらっちゃったね。ありがとう」

「いやいや。えーと、あとコレ前山に渡せばいいのか」

「職員室？」

「多分」

そう言つて拓海は机の脇に引つ掛けたスクール鞆を掴んだ。すると、

「ああ、そっち私のだってば」

南沢が言つた。

「ん？」

よく見ると妙にこの鞆は綺麗だと感じた。それに、拓海が2年のとき植え込みに引つ掛けてつけた傷もない。

「あ、間違えた」

鞆を南沢に返し、自分のを受け取る。

クラスの女子というものは、スクール鞆にキャラ物のマスコットをつけたり、ヘアアクセサリをつけたりなんなりして派手に飾っているが、南沢の鞆には入学当初から何もついていなかった。

「南沢は鞆になんかつけたりしないの」

「え？」

「ほら、女子は皆つけてるじゃん。デカいぬいぐるみとか」

「あはっ、私がそういう可愛いのつけそうな子に見えるんだ?」

「……いや、見えないな」

拓海が言っと、

「正直すぎ」

南沢はジト目になった。

並んで廊下を歩く。

吹奏楽部のトランペットの音と蝉の鳴き声が混ざり合って廊下に小さく響いていた。

「あ、野球部お弁当食ってる。いいな」

南沢が窓の外をちらりと見て呟いた。

主に3年生の教室が並ぶ4階の廊下からは、校庭がよく見下ろせる。校庭の隅っこの日陰で、泥だらけのユニフォームを着た1、2年生が固まって弁当を広げていた。

「もう昼か」

「私お腹すいた。朝食食べてないから」

「俺も」

「コンビニでも寄ってきますか」

「すずしーっ」

学年主任の前山にプリントを渡し終えたあと、ふたりはアパート近くにあるコンビニへ向かった。

自動ドアをくぐると店内は少し寒いくらい冷房が効いていて、掻いた汗が一瞬で引いていくようだった。

「アイスーっ」

南沢が店内に入るなりアイスの入ったガラスケースに向かって走っていく。

その姿がまるで小さい子供みたいだと拓海は少し笑った。

そしてさあ自分は何を買おうかと拓海は店内を見回し、その前に財布にいくら残っていたつけ、と思い立ち鞆の中を探ってみた。

「あれ」

念のためポケットにも手を突っ込んでみる。

「やべ」

「ん？」

「財布家に置きっぱだ」

「あらら。じゃあ私出すよ」

「え、マジで」

「ガリガリさんくらいなら奢ったげる。何味がいい？ ソーダ？

コーラ？」

「いや、できれば冷やし中華がい「私この前食べたんだけどこの洋梨ってのおいしいよー」

「……………」

「なに？ 洋梨にする？」

「ソーダをお願いします」

拓海には半強制的に60円のガリガリさんを選ばせたくせに、南沢

が手に取ったのは200円以上もするソフトクリームだった。

「お前はガリガリさんじゃねーのかよ」

「これが一番好きなの」

更に南沢はドリンクコーナーに向かい、2?ペットボトルのりんごジュースを抱えた。

そして更にもう一本手に取ると、

「はい、持って」

と拓海に押し付けた。

「糖尿病になるぞ」

「ご忠告ありがと」

「合計で1410円になります」

レジ打ちの店員が言うと、南沢は財布から千円札を二枚抜き取ってカウンターに出した。

脇でその様子を眺めていた拓海は、10円玉出せば釣り銭がぴったりの600円になるのに、とか思いながら黙って会計が済むのを待っていた。

南沢にレシートとお釣りを渡し終わると、レジ打ちの店員は何やら派手な色づかいの箱を取り出し、

「ただいまキャンペーン中で、1000円以上お買い上げのお客様全員に1000円につき一回くじを引いてもらってるんです」
と営業用スマイルで説明した。

「2等がアイポッツか……」

拓海が箱に表示されている商品を見て呟くと、

「じゃあ三宅引きなよ」

南沢は財布をしまいながら顎で箱を示した。

「どうせ残念賞でしょ。ポケットティッシュとか私いらないよ」

「お前な……」

店員の前で言うなよ、と心の中で呟きながら拓海は箱に手を突っ込んだ。

奥の方から適当にひとつつまんで引き抜く。

折りたたまれたくじを開くと、

「おっ！？ 当たり！？」

赤い当たりの文字が印刷されていた。

拓海が少し興奮気味で店員さんにくじを渡すと、

「おめでとうございます！ 5等賞ですね！」

「……何だこれ」

コンビニを出たあと、自動ドアの前で拓海が呟いた。

拓海が手にしているのは、このコンビニのマスコットキャラクターのウサギのぬいぐるみ。

手のひらサイズのそれは頭にキーチェーンが通ってあって、何かにぶらさげられるようになっていた。

五等賞の商品がそれだった。

「マジいらね……。どこにつけたよこんなピンクのウサギ」

「アイポッツじゃなくて残念だったね」

南沢が淡々とした声で、ちっとも残念じゃなさそうに言った。

「……………」

拓海はジト目で南沢を見ると、

「これやるよ」

「は」

「ほら」

「いらないうて」

「これはお礼なんだ！ ガリガリさん奢ってくれてありがとうという！」

「遠慮しますううう」

無理矢理ウサギを手に握らせようとする拓海を南沢は必死で押し返すが、身長差20センチ、細めの体格の南沢の力じゃ拓海はびくともしない。

南沢が観念してウサギを受け取ると、

「そうだ、それ鞆につけとけよ」

軽い調子で拓海が言った。

「はあ！？ 恥ずかしいし趣味悪い人って思われちゃうからやだよ」

「いいじゃん可愛いじゃんそのウサギ。南沢に顔似てるし」

「……ひどい」

「褒め言葉だっつの！」

「あーもうるさいなー、わかったよ」

南沢が渋々といった感じでウサギを鞆につけようとすると、

「きゃー!？」

レジ袋から大量の水滴がボタボタと滴って、アスファルトの地面に小さな水溜りをつくっていた。

「うわ、アイス入ってんじゃないその中！」

「早くしないと私のソフトががが」

「じゃ、さっさとその公園で食うぞっ」

ふたりは大急ぎでコンビニの裏手にある公園へと走った。

「あ、思ったほど溶けてない。やったー」

南沢がソフトクリームの蓋を開けながら言った。

ふたりは公園へ走った後、そこに設置されているベンチのうち木陰になっているところを選び、急いでアイスを開けた。

「こっちは結構溶けてるわ……」

拓海がガリガリさんの袋を開けると、溶けたガリガリさんがソーダ水となって袋の内側にたくさん溜まっていた。

「垂らさないでよ、べたべたになるから」

「はいはい」

拓海はベンチの側にあるくずかごに袋を放り入れる。

袋を捨てたあと何気なく覗き込んでみたくずかごの中は、今捨てたガリガリさんの袋以外ほとんど何も入っていないかった。

夏休み中だというのに公園で遊んでいる子供もひとりもおらず、塗装の剥げたブランコやすべり台は遊び相手がいなくて寂しそうにしていた。

「おいしー」

南沢がチョコミントのソフトクリームを口の周りにつけながら呟いた。

「俺はそれ嫌いだけだな」

「なんで」

「ハミガキ食ってるみたいな感じするから」

「えーっ、全然違うじゃん」

「……」

「……」

お昼時の公園の中は静かだった。

目の前の道路も人通りが少なく、たまに車が数台ゴーツと音をたて

ながら通り過ぎていくくらいで、ただうるさいくらいの蝉の鳴き声だけが公園に響いていた。

そんな公園の隅っこで、ふたりはどうでもいい会話をぼつりぼつりと交わしながら時間を潰していた。

このベンチに座っているとある程度涼しい。木々の枝の隙間から漏れてくる真夏のまぶしさも心地よく感じる。

うるさいと感じていた蝉の鳴き声も、このベンチに座って聞き続けているとなんとか眠気を誘ってくるようだった。

拓海のまぶたが少し重くなった時、

「私」

南沢が唐突に口を開いた。

「三宅と同じ高校目指そっかな」

頬杖をついて正面を見つめながら、南沢は珍しく真剣な顔で呟いた。

「……うん」

そんな南沢を見たあと、拓海も同じように正面を見て

「来ればいいんじゃないね」

と答えた。

すると、

「え、何それ」

南沢が言った。

「冗談だってば」

「は……！？」

「こっちだつて本気にするなんてびっくりだよ。もっとヘラヘラ笑いながら『なんでよ』とかいうと思ってたのに」

「……人が折角マジメに答えてやったのに……」

「何。私と一緒に学校行きたかったの」

「そういう訳じゃねー」

「嘘つかなくてもいいんだよ」

「いやだつてお前の進路が決まれば皆安心するだろ、俺も、お前の母親も、あと前山も」

「……………なにその保護者みたいな……………」

南沢はジト目で拓海を睨みつけると、

「ん？」

「あ？」

「三宅、ガリガリさんの棒見せて」

「ああ……………」

拓海が南沢にガリガリさんの棒を手渡すと、

「当たってるじゃんこれ」

南沢が目を丸くして言った。

「マジか。5等賞につづき今日はツイてるな」

拓海はそう言って、

「洋梨に換えてきてやるよ」

ベンチから立った。

「やったー」

南沢は足をパタパタさせて笑う。

公園から出て行き、当たり棒を小さく振りながら横断歩道を渡っていく拓海の後姿を見送った。

コンビニに入り当たり棒を見せると、さっきと同じ店員さんが

「お客さんツイてますね」

とか言いながら洋梨味のガリガリさんを渡してくれた。

拓海は軽くお礼を言って、外に出る。

病気になりそうなくらいの暑さ。手のひらにだけアイスの冷たさがじんわりと染みる。

横断歩道で信号待ちをしていると、向こうの公園のベンチにいる南沢の姿が裸眼で1.0の視力を持つ拓海にはハッキリ見えた。

（ぶっ、あいつなんだかんだ言いつつちゃんと付けてるじゃん）

南沢はウサギのマスコットのキーチェーンを真剣な顔で鞆の取っ手に通している最中で、拓海は心の中で吹きだした。信号が青になる。

またなんか言うところさいから見なかったことにしとくか、
しながら拓海は歩き出す。

すると、

大きな荷物を積んだトラックが、スピード違反にも程がある勢いで
横断歩道に向かっていた。

拓海が気づいた時には、既にフロントガラスが目の前に迫っていた
のだ。

信号を無視して横断歩道に突っ込んできたトラックは、拓海を大きく撥ね飛ばし、宙へ放った。

——やばい、これは死ぬ。

空中で拓海はそう確信した。

不思議と、体はゆっくり空に向かって舞い上がり、同じくゆっくりと地面に向かって落下していった。

周りからすれば、自分がトラックに撥ねられてから地面に叩きつけられるまで一瞬に見えるのだろうけど、拓海自身はまるで自分がスロー再生で操作されているように、時の流れがゆっくりだった。

——あー、こんな事になるんなら、朝目玉焼き食ってくりや良かった。

夏の水色に浮かぶ鮮やかな赤色は、飛んだ自分の血飛沫だろうか。誰かの悲鳴が聞こえる。

（南沢か？）

違う。見ず知らずの通行人だ。ベビーカーを押した若い女の人が、口を押さえて目を見開いているのが見下ろせた。

——ああ、お母さん、赤ちゃんにこんなグロイの見せちゃってごめんね——。

上がるところまで上がりつめた体は大きく弧を描き、今度は落ちていく。

——そついやガリガリさん手から吹っ飛んでやがる——。

横断歩道の向こうの公園には辿り着けなかった。

ゆっくり降下していく中、拓海は南沢を必死に眼で探す。

霞む視界の隅にようやくとらえられたのは、ウサギをつけた鞆を満
足げに眺める南沢の姿だった。

——なんだよ。なんだよその顔。気に入ったんなら素直に喜んで
けよ、バカ

——クソ、ここで人生終わりとかマジで有り得ねえ、トラックの
運転手ふざけんな絶対呪ってやる、死ね

——あ、やべ。死ぬ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2692ba/>

カゲロウデイズ

2012年1月12日19時02分発行